

【書評】

横山登志子, 須藤八千代, 大嶋栄子 編
『ジェンダーからソーシャルワークを問う』
(ヘウレーカ, 2020年, 四六判, 336頁, 3,000円+税)

三島 亜紀子
(立命館大学)

I. はじめに

まずは、本書の書評の評者の機会を与えていただいたことに、感謝申し上げたい。

というのも、これまで「ジェンダーからソーシャルワークを問う」てきたのかと、喉元に突き付けられ我に返るような思いをしたからだ。これまでの自らの書いてきたものを見直して、なぜジェンダーに正面から向き合わなかったのかと自問した。

答えは簡単なのかもしれない。世の中には、フェミニストを称する女性に対する嫌悪感にあふれた軽視や否定や侮辱であふれている。世に蔓延るステレオタイプなフェミニスト理解を前に、それを名乗る際には、はかり知れぬ面倒を覚悟しなければならない。自然と「ジェンダー」や「フェミニズム」への言及が少なかったのは、このあたりに理由がありそうだ。

以下では、本書の概要を紹介したうえで、本書の評価点と考察を記したい。

II. 本書の概要

編者代表の横山登志子によると、主に以下の二つを発信するものという。

あらゆる種類の抑圧と排除につきまとう「男

／女」の二項対立的なカテゴリー化に基づく権力構造（ジェンダー）に対して、抑圧と排除に抗う者として機能するはずのソーシャルワーカー／ソーシャルワークが、残念なことに善意から、意識せずに抑圧に加担するという構造上の死角が存在すること

(略)

ミクロ・メゾ・マクロの一体性を説明することに終始する狭義の「方法」論としてでもなく、援助関係を「援助者－利用者」という二項対立図式にとどめやすい狭義の「援助」論としてでもなく、「支援を契機とする社会的協働実践としてのソーシャルワーク」として位置づけることの重要性 (pp.3-4)

これらを基本に本書は、7章とコラムで構成されている。このコラムというのは、札幌の「援助者のためのジェンダー学習会」に参加する若手ソーシャルワーカーによって執筆されたもの。本書が編まれたそもそもの発端も、日本社会福祉学会北海道ブロック主催によるレナ・ドミネリ著『フェミニストソーシャルワーク』の合評会であったという。このとき訳者の須藤八千代が招かれ、「社会福祉学におけるジェンダー、フェミニズム研究をいまのままに放置してはいけない」という想いがぶつけられた。その「札幌の夜」に、本書の上梓につながる「ソーシャルワークとジェンダー研究会」がスタートしたという。こうした経

緯からも、数多の実践や経験や議論や雑談、時間と幸運な出会いを経たことが分かり期待感が高まる。

第1章は、研究会を主宰した横山による「語られていない構造とは何か」、ジェンダー論考が乏しいソーシャルワークの実践／理論の現状や背景をおさえたうえで、ソーシャルワーカー／ソーシャルワークに構造的に組み込まれているジェンダー不平等について述べられた。「ジェンダー・センシティブ」（ジェンダー・バイアスをもたず接する態度、ジェンダーを適宜考慮する方針）な実践をおこなうためのチェックリストが示されている（pp.24-32）。「苦い経験」としてあるという自らの支援事例の検討を通じて、利用者が語らなくとも構造的な抑圧を読み取り、そこへの“Social”な応答が求められると主張する。

第2章の須藤による「女性福祉からフェミニストソーシャルワークへ」、須藤は、横浜市の福祉職としての長年の経験を踏まえて、これまで日本のソーシャルワーク領域におけるジェンダー視点に基づく研究をけん引してきた。日本の社会福祉学における「女性福祉」が長らくの間、児童・家庭福祉の一部としてあった歴史的経緯を辿ってその限界を指摘し、フェミニストソーシャルワークへの跳躍を企図する。

第3章は『家庭福祉原論』などの著書のある鶴野隆浩による「家族福祉論を通して、ジェンダーを社会福祉学に位置づける」である。ジェンダーと社会福祉学をつなげる理論的な道筋を明らかにするべく、家族福祉論、および社会福祉の本質を問う理論研究を経由する2つのルートが検討される。基礎にあるのは「社会福祉学の変節＝社会福祉の本質を問う理論研究の停滞」（p.100）が顕著であるという危惧であり、社会福祉学における家族福祉論や「女性福祉」などの変遷を丁寧に辿りつつ、ジェンダー概念から社会福祉学の問い直す戦略が描かれた。

第4章は、大嶋栄子による「性被害体験を生きる」。大嶋は、特定非営利活動法人リカバリー代表で、著書『生き延びるためのアディクション——嵐の後を生きる「彼女たち」へのソーシャル

ワーク』で2020年度日本社会福祉学会賞奨励賞を受賞している。本章は当事者Tによる語りと、20年に及ぶ著者との援助関係が描き出す事実によって構成される。現実の支援は、教科書的な「アセスメント」→「プランニング」→「実施・介入」→「モニタリング」・・・といった、リニアな形で展開されることはほとんどない。「共有したはずの課題とは異なるものが、全く予期せず現れることが日常茶飯事」（p.137）である。本章は現在から過去にさかのぼる順に論は進み、「当事者の断絶し混乱した『時間』の経験と語り、さらにソーシャルワーカーの支援における『時間』の経験は複雑に交差する」（p.8）。

第5章は、宮崎理による「“LGBT”とソーシャルワークをめぐるポリティクス」。ベル・フックスによる「性差別をなくし、性差別的な搾取や抑圧をなくす運動」というフェミニズムの定義に拠ると、“LGBT”を含む性の多様性に関するイシューも、フェミニズム／ジェンダー研究の範ちゅうと考えられる。多様性尊重の文脈では、「みんな違ってみんな良い」かのように理解され、「既存の性の規範に対する社会構造的な分析はなく」、「『個人的なこと』を『政治的なこと』へとつなげる回路を切断し、単に『その人だけのこと』として解釈してしまう危険性を孕」（pp.201-202）むもので、「『“LGBT”への支援』は、セクシャル・マイノリティである人びとの哀悼可能性を損ない、その生の承認を阻」（p.218）み、ソーシャルワークの非政治化やセクシャル・マイノリティの人々の他者化が進むと懸念する。そこで、ジュディス・バトラーや掛札悠子の論考を手掛かりとして、それらの克服が試みられた。

第6章は新田雅子による「『晩年の自由』に向けてのフェミニストソーシャルワーク」。専門職と家族を含む周囲の者が、老いゆく者のケアを社会的に担っていく根拠として「ジェネラティヴィティ」（generativity 何か生み出したいという欲求や、伝統や文化等を次の世代に継承するような態度）が掲げられる。ケアの相互行為は「〈継承〉」と意味付けられ（p.232）、高齢者福祉の現場やライフヒストリーの聞き取りは〈継承〉の貴

重なる場となる。章の後半は、「今が一番幸せ」と言う、北海道の限界集落に一人暮らす高齢女性のライフストーリーが記されている。旧優生保護法の時代、北海道の優生手術件数は都道府県別で圧倒的に最多であったが、その実態の一面が伺える貴重な証言も含まれる。

第7は中澤香織の「内面化したジェンダー規範と戸惑い、葛藤」。母子生活支援施設の母子支援員へインタビューを行った調査研究である。施設では、母親は利用者であると同時に子どもへのケア提供者であるという二役を課せられる特異な存在である。また職員も専門職であると同時にジェンダー・バイアスに憤りを感じる一生活者であり、同様に「二重構造」にある。そうした施設における支援では、「生活問題の背景にあるジェンダーに関する職員の理解が不可欠」で、そのためにも「ソーシャルワーカーとしての自らの人生／生活と、そこから内面化した価値観と向き合っていかなければならない」という。そして「貧しい資源しかもたない職場、過重な仕事量、冷たい同僚、さらに敵意を持った“クライアント”」(p.299)といった「困難な環境」で働き続けるためには、ネットワークとサポートシステムを作り出すことが必要というレナ・ドミニネリを引用し論を終える。

Ⅲ. 本書の評価点

本書がソーシャルワーク研究にとって重要と考えられる理由として、第1に、日本のソーシャルワーク／社会福祉学領域にあった空白を埋めたことがあげられる。

試しに本書を Amazon のサイトで検索してみると、「この商品に関連する商品」にあがったのは、ジェンダーの視点からのマンガ研究と、社会福祉士国家試験の攻略本であった。評者が大学院生であった頃（1990年代後半から2000年代初頭）、杉本貴代栄による『社会福祉とフェミニズム』（1993）や『社会福祉のなかのジェンダー福祉の現場のフェミニスト実践を求めて』（1997）、『ジェンダーで読む福祉社会』（1999）

を興味深く拝読した記憶がある。これらの研究は須藤によって「社会福祉における最初の成果」（p.61）と評価されるものの、1990年代後半から「フェミニズムの視点」がもつ政治性が排除され、「女性福祉」は「フェミニズム理論と距離を取って社会的バッシングを逃れた」（p.63）。

1990年代、少子高齢化の進行が加速し、児童虐待や家庭内暴力が社会問題化され、社会主義諸国の崩壊により「新自由主義が依拠する『強い個人』（男女を超えた理念として）」が力を増した。鶴野は、この時期に家庭内での女性の負担が問題視されるようになり、ジェンダー概念が社会福祉分野に導入されたものの、家族に埋め込まれた権力構造への洞察や、社会福祉という営み事態をジェンダー概念で再検討するということにまでは至らなかったと指摘する（pp.106-111）。

第2に、ジェンダー概念がソーシャルワーク／社会福祉学という学問領域のなかで周縁化されてきたことを指摘した点があげられる。

現在、社会福祉学会の中に「女性福祉・ジェンダー」という分科会があるが、「ごく少数の研究者が集まる分科会に『ゲッター化』され放置され押し込まれている」（p.54）現状にあるという。

家族頼みの福祉すなわち家族福祉を社会福祉学の門番にして、家族から切り離された女性という個人や、フェミニズムの家父長制を通じた近代家族批判とも無縁なままに現在に至っている（p.57）。

B・G・コリンズの「ソーシャルワークはその本質においてフェミニズムである」（p.55）という言葉とはうらはらに、「フェミニズムやジェンダーの研究は、周りの空気をうけて杉本貴代栄先生を中心に小さくまとまってやってきた」（p.326）と須藤はふり返る。「空気」（山本1983）との戦いは、#Mee Too 運動といったグローバルな運動の広がりや「ジェンダー・ギャップ指数」などといった国際的なランキングによる追い風を受けつつ、やはり本書のように学問の内部からあつてしかるべきだろう。

第3に、「支援を契機とする社会的協働実践としてのソーシャルワーク」を「素描」した点、既存のソーシャルワーク論は、対象となる問題や利用者を客体化し、分析を行って支援につなげるといった描き方であったが、「身体感覚をもって利用者（当事者）と対峙し、悩み、葛藤し、引き受け、見守り、同時代を生きる証人として存在するソーシャルワーカー／ソーシャルワーク」として描かれた。この時、ソーシャルワーカーは「支援者」であると同時に、「証人」であり「語りを聴いた者」、「出会った者」である (p.4-5)。

ソーシャルワークのグローバル定義の注釈部分では、「ソーシャルワークは、できる限り、『人々のために』ではなく、『人々とともに』働くという考え方をとる」と明記されている。本書にも、たとえば職員が『『子育ての仲間みたいに』利用者」と情報を伝え合い、ともに母親として成長するという経験をしたと語る」ことなどが記される。

またグローバル定義には「多くのソーシャルワーク研究と理論は、サービス利用者との双方向性のある対話的過程を通して共同で作られられてきたもの」とも書かれている。しかし、これに続く「それゆえに特定の実践環境に特徴づけられる」という部分は、本書が照準する難問をもたらさうものだろう。たとえば“female profession”とみなされることが多かったソーシャルワーカーであるが、日本にやって来ると、このジェンダーロールは反転した (三島 2018)。ソーシャルワークという学問の場の男性化というローカルな環境が現在に続く「空気」と通底するかも知れない。しかし、2014年のソーシャルワークのグローバル定義は、差し迫ったリスクが発生しないかぎり、それも一つの「特定の実践環境」として容認する姿勢のように思える。

IV. おわりに

評者が本稿の執筆中、新型コロナウイルスの感

染拡大などの影響を受け、減少が続いていた国内の自殺者数が増加に転じたと報じられた。女性の自殺者の増加率は7月で前年比16%増、8月が40%増、9月が28%増と著しく多かった。自殺にいたるには複数の要因が絡み合っているため、単純にコロナ禍の影響のしわ寄せが女性に向かったとは捉えられないが、非正規雇用労働者（女性の割合が多い）の雇用環境の悪化やシングルマザーの苦境は現実だ。

また社会福祉の内外で繰り返される「自助、共助、公助」も、女性の労働抜きには成立しないだろう。自助では「家族によるケア」、つまり女性によるアンペイドワークが、共助では地域社会にある女性が多く参加する「アンペイド・パブリック・ワーク」(三島 2017)、公助では不安定で低賃金のケア労働者（その多くが女性）が想定されている。「社会福祉制度自体が低賃金女性労働者を前提として組まれて」おり、「『貧困の女性化』は社会政策や社会構造にビルドインされている」(pp.118)ものの、わたしたちは看過してきた。

そうした状況下で本書が広く読まれ、現在の日本のソーシャルワークの大きな一石を投じるものであってほしい。編著者らの想いに心から敬意を表しつつ、ぜひ一読をお勧めしたい。

参考文献

- Dominelli, Lena (2002) *Feminist Social Work Theory and Practice*, Palgrave. (=2015, 須藤八千代訳『フェミニストソーシャルワーク——福祉国家・グローバリゼーション・脱専門職主義』明石書店.)
- 三島亜紀子 (2017) 『社会福祉学は「社会」をどう捉えてきたか——ソーシャルワークのグローバル定義における専門職像』勁草書房.
- 三島亜紀子 (2018) 『^{ソーシャル}社会的なもの』の仕事と社会学のあいだ——反転したジェンダーロールと在来知』『福祉社会学研究』15, pp.31-48
- 山本七平 (1983) 『「空気」の研究』文藝春秋.